鎌倉の元禄・大正関東地震の被災記録から

―被害状況の比較検討―

浪川　幹夫

§1　はじめに

令和五年（二〇二三）は、元禄・大正関東地震発生から三二〇年・一〇〇年の節目の年である。この両地震は相模トラフを震源域とした海溝型巨大地震で、元禄関東地震（以下、「元禄地震」と表記する）の地震規模はM（マグニチュード）＝七・九～八・二、また大正関東地震（以下、「大正地震」と表記する）はM＝七・九～八・一と推定されている。[1]

第五代将軍徳川綱吉（一六四六～一七〇九）の治世後半期に発生した元禄地震（元禄十六年十一月二十三日〔一七〇三・一二・三一〕）は、宝永四年十月四日（一七〇七・一〇・二八）の宝永南海地震及び同年十一月二十三日から続いた富士山噴火（一七〇七・一二・一六より約十五日間）とともに、幕政のみならず諸国の人々の生活と生業に打撃を与えた。そして、大正地震は大正十二年（一九二三）九月一日に神奈川県西部から相模湾を震源として発生し、首都圏を壊滅させた。

元禄地震は津波の襲来が広範囲に亘ったことや、房総半島南部での地盤の隆起量の大きさから、地震の規模と被害が大正地震を上回っていたといわれている。[2]では、鎌倉において、果たしてその通りであったのだろうか。そこで本稿では、両地震に関して新たに得た史料のほか、別表の「〔資料〕鎌倉における元禄・大正地震の主な被災記録から」と、拙稿「【資料紹介】大正地震における社寺被災史料について」[3]で示した「No.1『大正十二年　社寺書類　震災被害調　鎌倉町役場』（鎌倉町長　早川義雄宛提出）より報告書類」及び「No.6　社寺の被害状況写真集」などから、当地における元禄・大正両地震の地震規模や被災状況について、共通点や相違点をできるかぎり明らかにする。

なお本稿では、名称や地名のほか、史料の所在位置の表記、全文の構成等を左記の通りとした。

・江戸時代までの「寺社」は、明治時代以降に使用された「社寺」として表記した。

・鎌倉にある地名のうち、「扇ヶ谷」「由比ヶ浜」は村名や歴史上の名称として、また、「扇ガ谷」「由比ガ浜」は行政上の地区名称として、それぞれ区別して表記した。

・①～㊱は、図5「鎌倉の元禄・大正地震の記録・史料所在位置図」及び図6「鎌倉の元禄・大正地震の記録・史料所在位置図（若宮大路周辺）」に表示した切通や社寺などの番号に対応する。

・本稿に示した大正地震の被災状況写真については、例えば（紀要5の図8）のように表記したので、これらの写真の確認は、拙稿「【資料紹介】大正地震における社寺被災史料について」の「No.6　社寺の被害状況写真集」を参照されたい。[4]

・別表「〔資料〕鎌倉における元禄・大正地震の主な被災記録から」は、編集上の都合により本稿の末尾に横書きとして配置した。

§2　元禄地震における鎌倉での被災史料について

元禄地震は、鎌倉でも被害が甚大であった。以前、拙稿で当地での同地震

について記したが、[5]さらに近年の調査によって新たな史料が得られたので、本稿に記載した。

§2―1光明寺（乱橋材木座村）での元禄地震の津波について

光明寺⑳での津波については、『基熙公記』の「光明寺津波入」の記が知られている。[6]さらに、浪川ほか「鎌倉における過去の津波について」は、同寺檀方の譜代大名内藤家に伝わった、元禄十六年十二月『江戸状案詞』（明治大学博物館蔵『内藤家文書』）にみえる同家「浜屋敷」での被害状況のほか、元禄十一年（一六九八）建立の現本堂大殿（海抜高七・五m）に浸水した記録がないことから、当地の津波到達高を最大でも六～七mと推定した。[7]そして、同史料には津波やそれ以外にも同寺境内と同家施設の被害状況が伝えられているので、原典からそれらの内容などが書かれた部分を抽出し、本稿に掲載した〔付録史料編〕(1)。

同史料は、地震発生直後に鎌倉から同家の江戸屋敷や国許にもたらされた報告と、その後の同家による対応を示したものである。その概要は、

鎌倉も江戸と同じく激甚で、光明寺に所在する内藤家墓所では、石塔類で頂部の九輪のほか笠石と胴石が落下し、土台の石などが破損した。また、石造位牌も損傷が夥しく、石燈籠は全て倒壊するなど所々で被害があった。

そして、墓所の玉垣は過半がはらみ、石が落ちた箇所があったが、墓所に附属する御霊屋（みたまや）と唐門は共に少しだけ損じたとし、そのほかは、

・同家御霊屋内部で本尊観音菩薩像の御手が少し損じたほか、古仏や同家の位牌も少し壊れた。

・同家御書院の茶の間と台所は全潰し、戸障子などはすべて破損して使用不能となった。

・同家「内御仏檀」の本尊阿弥陀如来像ほか古仏がそれぞれ少破した。

・光明寺方丈内の仏壇にある同家の位牌は、無事であった（なお、同方丈の被災記録は今のところ存在しない）。

・光明寺の本堂が破損したほか、境内も損じたようであった。

・同家「浜屋敷」では、津波で漁船が二艘打ち上げられて同屋敷の長屋に当って破損。さらに、同屋敷の建物も過半が傾斜した。また、「塩」（海水）は畳より三〇cmほど上がったというが、詳細は不明であった。

そして、その後の対応は、

御位牌所は修繕し、御霊屋と唐門の小破部分は年内に修理するが、墓所の修復は来春になってからにしたい。今は江戸城廻りや同家江戸屋敷などの被害が著しいので、石切り作業などがことのほか行き届かなくなっている。ただ、墓所修復作業の見積りは実施した。その結果、石塔は破損した部分を叩き直して小さくし、使用不能になったものは新規に替えることとしたほか、玉垣や石燈籠などの修復についても、これらと同様に見積もった。その他の修理見積りも行ったが、年内は日が無いうえ寒い時期にもなっているため建物の壁を剥がすことなどは出来ないので、作業は延期すべきであると、石屋らも申している。

ということであった。

ところで、『第40回歴史地震研究会 巡検 鎌倉の海岸低地と1703・1923年関東地震 案内書』でも記したが、[8]内藤家の「浜屋敷」については、延宝二年（一六七四）の徳川光圀『鎌倉日記（徳川光圀歴覧記）』の「光明寺」の項にある「山ニ善導ノ墓アリ。寺内ノ南ニ、内藤帯刀（岩城平城主）忠興室ノ菩提所アリ」の

記[9]ののち、寛政九年（一七九七）の田良道子明甫『相中紀行』に「又弁天の社の左ニ内藤忠興一家の菩提所あり」とある。[10]貞享二年（一六八五）刊『新編鎌倉志』所収の「光明寺図」（裏表紙参照）及び享保五年（一七二〇）頃に制作された『光明寺境内絵図』（市指定文化財）には、「山門」の右方向に「内藤忠興菩提所」と記された二棟の堂宇が描かれている。これを現在の地図に合わせると、その部分は現山門の南側となる。史料にみえる「内藤帯刀忠興室ノ菩提所」（岩城平城主）や「内藤忠興一家の菩提所」は、光明寺境内を出た南側、現在の内藤家墓地（市指定史跡）になるので、「浜屋敷」はその近くの西側で、同寺境外の海岸寄りにあったと推定できる。

このことは、嘉永三年（一八五〇）同寺蔵『光明寺境内図』からも窺える（図1）。同図に示された「内藤家霊屋」（現内藤家墓地内。海抜七・八m）の西に、青地を境にして一段低く表現した「霊屋附畑」があって、さらにその西側の海岸との間には百姓持ちの耕作地が南北に連なって配されている。同図の「内藤家霊屋」と「霊屋附畑」の記からすれば、図示されたこの畑のほか、海岸近くの耕作地が同家「浜屋敷」の跡地であったとしても矛盾はない。その跡地の推定位置は図2のとおりで、現海抜高は五～六mである。

内藤家「浜屋敷」推定地の海抜高が現在と同じであったとすれば、当地での元禄地震による津波の海岸到達高は、大正地震の場合と同程度であったと考えられる。そして、光明寺側には津波に関する史料はない。そこで、『江戸状案詞』の「浜屋敷」の記事を見た場合、『基熙公記』に書かれた「光明寺津波入」は、果たしてそのとおりであったのだろうか。この、同寺境内に津波が入ったとした記述をどこまで信じてよいかは判らないので、津波は境内までは浸入してはいなかったとするのが穏当となる。[11]そこで、享保五年頃の『光明寺境内図』を見ると、それには総門が描かれ「学誉代　廿六間引出修復」と注記されている。総門は現在より二十六間（約三一m）東奥にあったようで、以上のことからすれば、津波の到達位置は、最奥でも引屋をする前の総門の手前までになるのではなかろうか。

これら以外、同寺での地震関係の記事は、什物帳や本堂の修理関係文書にみえるほか、[12]彫像にもある。木造深誉上人坐像（現市指定文化財）の享保八年（一七二三）像内納入文書〔付録史料編〕⑵によれば、本堂本尊の木造阿弥陀如来坐像（鎌倉時代・現県指定文化財。同史料にある「金色之三尊」の中尊のこと）のほか、同寺開山然阿良忠坐像（室町時代・現市指定文化財。同史料にある「尊影」のこと）や同寺第二世寂恵良暁坐像（鎌倉時代、現市指定文化財。同史料にある「白簾」のこと）、木造八臂弁才天坐像と木造善導大師立像（共に江戸時代）なども破損したようで、それらは同年までに修復、あるいは「新建」（造立）された（ただし、八臂弁才天と善導大師の両像が、この時の作であるかは判らない）。[13]同寺における諸堂宇の被害は軽微であった一方で、建物内部に置かれていた彫像や什宝類が破損した。

§2―2　新居閻魔堂円応寺（乱橋材木座村）の位置と海抜高について

円応寺旧跡㉓での津波については、『基熙公記』に「あらひ円応寺ゑんま堂大破いたし候」と、同寺の建物が大破したことが伝えられている。[14]そして、その所在地は、寛永末から正保頃とされる『玉舟和尚鎌倉記』に「浜ノ中ニ只一ツ堂アリ」、[15]また自住軒一器子が延宝八年（一六八〇）に認めた『鎌倉記』（金沢文庫蔵）に

洲崎の海士の家居をば飯嶋と云、是より東の方は三浦なり、帰るさに、あ

ら井の閻魔堂へおもむき、一町ほど浜の方へゆきて左の方へ舟橋を長々とかけたり、堂は閉帳にてその益なし、され共昔みしよりはちいさけれども堂もあらたまりぬ、

とある。[16] 文中の「あら井の閻魔堂」（新居閻魔堂円応寺）が描かれた絵図は、江戸時代前期の『相州鎌倉江之島図』（鶴岡八幡宮蔵・市指定文化財）ほか数例が存在する。当堂（寺）は元禄地震の津波で壊滅的な被害を受けるまで、閻魔川西側の海浜部に所在した（現在は鎌倉市山ノ内、建長寺近くにある）。この川については、自住軒一器子『鎌倉記』の記述以外にも、宝永二年（一七〇五）「油（ヤヽ）井浜間数之覚」（『材木家文書』）に「弐百間　大鳥井下より円魔川迄」とあって、材木座側に河口があったことが判っている。[17] さらに、『材木座村絵図』（制作年未詳・鎌倉市中央図書館蔵）に書かれた「円応寺領畑」「元禄五年申三月円応寺江寄附之地」「墓地」の範囲を旧公図で確認すると、円応寺旧跡である「あら井の閻魔堂」が所在したのは現材木座三丁目四三一～四三六番と同五丁目四五四～四五七番・同九四六番の一部あたりと推定できる㉓。ただし、同旧跡推定地の、当時の地盤高は不明であった。[18]

ところで、令和元年（二〇一九）六月から十一月にかけて、同旧跡推定地の西側で発掘調査が実施され（材木座五丁目九四六番一）、そこでは六つの遺構面のうちの十六世紀後半から十八世紀初頭と推定した海抜三ｍ程の第二面で、土丹道路や埋葬遺構、方形竪穴建物などが確認された。第二面の推定年代については、直下の第三面の遺構を埋めた「混じりがなく粒の粗い白灰色砂層」から得ており、この結果からすれば、当該発掘調査地点における十八世紀初頭の海抜は、おおむね三ｍ程度とするのが穏当となる。[19]

まだ明確なことは判らないが、「あら井の閻魔堂」を壊滅させた津波の高さは、それを超えた程度であったかも知れない。

§2―3　寿福寺と英勝寺（扇ヶ谷村）のこと

寿福寺と英勝寺の境内は、大正地震での被災状況からすると（紀要５の図14・15）、元禄地震でも被災していたと思われる。

現在の寿福寺⑧の仏殿については、大正地震後の改修時に組子古材から発見された、再建を示す「開山五百年忌時、仏殿造立ノ古記」がある。これは、『歴代過去帳』にある第九十四世法山禅演（宝暦九年〔一七五九〕十一月二十七日示寂）の註記にも

仏殿建立ノ師ナリ、開山五百年忌時、仏殿造立ノ古記、大正十三年十二月十七日仏殿大改修ノ日、組子古材の内発見ス、住山元譲誌之

とあるので、同仏殿は開山五百年忌にあたる正徳四年（一七一四）の建立となる。このことは、現仏殿が元禄地震で被災した後の再建であると示したのかも知れない。[20]

英勝寺（⑧の北隣）についても、元禄地震に関する直接的な記録はみられないが、歴史地震の関連史料としては、『水戸様御地震の間仕用（御ちしんの間仕用）』（個人蔵・市指定文化財）がある〔付録史料編〕⑶・（図３）。これは建長寺大工副棟梁のほか、英勝寺の庶務や維持管理等を担った鎌倉扇ヶ谷の堂宮大工河内家に伝わる古文書のひとつで、年月日は未詳である。同文書を見ると英勝寺の「御ちしんの間」は、中柱が六寸二分、大柱が七寸二分と太く、天井上と床下に設けられた十文字をなす水平筋違がある頑丈な耐震建築物であったことが窺える。また、関口氏は「御ちしんの間」が同寺境内で「部屋ではなく、すくなくとも別棟の建物か、おそらく独立した建物であ

る」としているが、[21]『新編鎌倉志』掲載図と、[22]享保十九年（一七三四）十二月に「大工 河内長左衛門」が描いた『鎌倉英勝寺様御寺内惣御絵図』（個人蔵・市指定文化財〔図4〕）には、その名の建物はみられない。[23]

ところで地震の間は、江戸時代に城内や寺院境内などで、地震および余震の避難用として造られたという。この種の建物としては、彦根城内に現存する旧藩主の下屋敷「楽々園」が知られ、これは寛文二年（一六六二）の大地震を受けて延宝七年（一六七九）に建てられたと考えられている。[24]

確かなことはいえないが、仮に「楽々園」の建立時期が正しかったとすれば、『水戸様御地震の間仕用』も大地震の後に書かれたともできるので、同書の「御ちしんの間」は、元禄地震の約三十年後に描かれた『鎌倉英勝寺様御寺内惣御絵図』にある、何れかの建物の可能性が想定できる。

§2―4 覚園寺（二階堂村）の被害について

昭和二十六年（一九五一）の覚園寺⑩の本尊薬師如来坐像の保存修理で、像内から発見された宝永元年（一七〇四）の修理銘札によると、同寺では大地震で仏殿をはじめ諸堂宇が傾斜あるいは大破し、尊像が破壊されたので、同年の夏から秋にかけて木造薬師如来坐像と日光菩薩・月光菩薩両坐像、木造十二神将立像（全て現重要文化財）の修理が行われたとある〔付録史料編〕[25]⑷。この銘札は、『特別展　鎌倉震災史 ―歴史地震と大正地震―』でも紹介したが、[26]これ以外のものを示していなかったので、関連史料とともに本稿〔付録史料編〕に掲載した。

同寺の住職であった大森順雄師は、薬師如来坐像の修理銘札に書かれた「宝永改元の暦孟夏より修補を始め仲秋迄に悉く功を成す者也」を同像修理のこととし〔付録史料編〕⑷、薬師堂内の諸尊像の修復が完了するまで数年を要したと推定した。これについては、同四年八月二十八日の月光菩薩光背芯裏板墨書銘、同五年十一月二十六日の住吉明神社棟札からも窺える〔付録史料編〕⑸⑹。さらに、同寺では元禄地震の八年後に木造地蔵菩薩立像（黒地蔵。現重要文化財）や千躰地蔵尊を安置する新しい地蔵堂が建立され、その二十年後の享保十六年（一七三一）四月二十一日、同堂の屋根に空輪露盤が附加された。このことは、大正地震で倒壊後に発見された同堂の棟札からも明らかである[27]〔付録史料編〕⑺。なお、当堂は昭和十四年（一九三九）に建て替えられた。[28]

§2―5 手広村の被害について

元禄地震での、鎌倉の村方における被害を伝えた史料は少なく、雪ノ下村や山ノ内村などに散見されるほかは、手広村のものが一部現存するのみである。手広村については、以前、内海家の元禄十六年『田畑地震崩道筋帳』に書かれた田畑や道筋などでの被災概要を紹介したが、[29]このほかにも、同家文書の宝永三年正月「畑方金納願書」と同年九月「差上申証文之事（畑方金納請書）」があるので、本稿に追加して紹介する〔付録史料編〕⑻⑼。これら二つの古文書から、地震で地下水が流失し不作になったため畑方での金納を嘆願したことや、追い打ちをかけるように旱魃になったことで、村々が困窮したさまが窺える。[30]

さらに、明治二十七年（一八九四）生れの同家当主が祖母から聞いた話によると、この地震の際、同家と梶原村の「車屋」と称した家の二軒だけが倒壊を免れたという。この時、倒壊を免れた主屋は、昭和五十六年（一九八一）

に二階堂の覚園寺境内に移築復原されたもので、もとは手広七五八番地㉝に建っていた（現県指定文化財）。そして、移築にともなう解体時の調査により、ヒロマ上部の大梁枘から発見された墨書銘から、地震後の宝永三年に改築再建されたことが明らかになった[31]〔付録史料編〕⒀。

§2―6 鎌倉近村の被害について

三浦半島における元禄地震のことについては、久保木実氏の論攷で紹介されている[32]。そこで本稿では、そのうちから鎌倉に近い逗子・葉山方面の村々について、その概要を示しておく。

・木古庭村（現葉山町木古庭）

『新編相模国風土記稿』の不動堂の由来によると、元禄の末に滝の水が涸れたとあるので〔付録史料編〕⑽、氏は「元禄大地震と関係した現象」と推定した。

・桜山村（現逗子市桜山）

宝永五年（一七〇八）「御救金割合覚」の書入れは、元禄地震で山崩れと谷の埋没や、家の倒潰とともに、大津波が一里程（約四㎞）浸入したと伝えている〔付録史料編〕⑾。

・池子村（現逗子市池子）

同四年「客殿建替のため請取申松材之事」（『東昌寺文書』）は、東昌寺（現逗子市池子二―八―三三）の客殿が破損したことを伝えている〔付録史料編〕⑿。

・小坪村（現逗子市小坪）㉞

小坪村には、『基熙公記』の「こつ村切どをし破損、民屋のこらず津波にとられ候」の記述がある。さらに、同氏は論攷の中で「小坪村の享保四年（一七一九）の年貢割付帳には、『前々地震山崩引』が田二畝十八歩、畑三反九畝二歩あったことが記されている。享保以前に起こった大地震による山崩れは、先の桜山村の記録に『山クツレ』もあったことや切通が崩れたことからすれば元禄大地震によるものと思われる」と記しており、これらの内容は、同村での甚大な被害を如実に伝えている。

§3 大正地震での鎌倉における概況と新資料について

『鎌倉震災誌』によれば、当時の鎌倉方面の被害は、鎌倉町（現在の大船・山ノ内・腰越地区等を含まない範囲）で、全壊一四五五戸、半壊一五四九戸、埋没八戸、津波による流失一一三戸、全焼四四三戸、半焼四戸、死者四一二名、重傷者三四〇名。大船・山ノ内で、全壊四五〇戸、半壊八〇戸、死者一八名、負傷者二三名。腰越津村で、全半壊合せて三一〇戸、死者七〇名であった。深沢村もかなりの被害を蒙ったというが、詳細は不明である（当時の鎌倉町の全戸数は、四一八三戸。大船の全戸数が六三五戸で、腰越津村は五〇〇戸以下であった）[33]。

このほか、地震発生当時、建物の倒壊や地上に現れた亀裂、鎌倉大仏⑭と光明寺⑳の山門が動いた方向（別表参照）などの状況から、地震はほぼ南北に強く動いたていることが確認されている[34]。さらに近年では、この地震について新たな資料が得られたので、ここで紹介することとした。

§3―1 津波遡上に関する新資料

それは、延命寺南側の滑川沿いにあった、海軍軍人井上敏夫（一八五七～

一九二四）の邸宅で、実際にあったことである（大町九六〇番地）⑬ｅ（図6参照）。同家の倒壊で部材に挟まれた氏の妻が、川を遡上して来た津波の浮力で難を逃れたもので（平成三十一年〔二〇一九〕四月六日の同氏親族の談）、これは、川の遡上による内陸部への浸水状況を如実に示した、唯一の伝聞記録といえる。

§3―2　鎌倉大仏の被災と修復について

『長谷区 震災誌編纂資料 相澤』（相澤善三〔鎌倉町役場主事。のち鎌倉国宝館主事〕の原稿）の「〇社寺被害状況 高徳院」には、大仏⑭の台座は構造上裏込めが不完全であるとともに、その前面には捨て石がなかったので、そのため沈下した、とある。[35] さらに、平成十二年度に鎌倉大仏とその周辺で行われた発掘調査では、台座後方（北側）一六ｍ地点から北方に向けて深掘りした際、現地表（海抜約一四ｍ）の下約二・六ｍ以下は柔らかい粘質土で、その上が通称土丹岩で厚く地業されていたことが判明した。[36] そのうえ、翌年度の発掘調査では、尊像から南方約六〇ｍの地点（海抜約一二ｍ）で人工的な地業面や土丹地業層の下部について、福田誠氏は「海抜10.4ｍから海抜９ｍの地山面までの土層堆積は砂質土層と腐食土層の互層であった。（中略）地山面直上17層暗灰色粘質土層の中には、淡水産の巻貝や芦、葦等の植物遺体が含まれ、大仏造営以前は谷内の湿地だった」と推定した。[37]

像が坐す南前方は湿地帯であったようである。そして、像の下部はもともと谷地形で、そこを人工的に地盤改良したためだろうか、元禄・大正の両地震とも像が大きく傾いたと考えられる。

§3―3　手広村内海家の被害について

前述した手広村の旧内海家住宅㉝では、移築復原にともなう解体時の調査により、元禄地震のことを記した墨書銘のほか、大正地震で被災後に修理したことを伝える墨書銘が確認された〔付録史料編〕⒁。このことから、同家住宅は元禄地震の時と同じく、倒壊を免れたことが窺える。[38]

§4　史料からみた元禄・大正地震の比較について

ここでは、本稿に記した補遺内容と、文末の別表「〔資料〕鎌倉主要寺社の元禄・大正地震の被災記録から」などで対比した元禄・大正地震について、被害状況の共通点や相違点を確認する。

§4―1　交通要路の被災状況

鎌倉の切通や往還路については、小袋坂切通②と大仏坂切通⑱は明治時代にルートが変更されているので、元禄・大正両地震での共通点や相違点はわからないが、峠坂切通（朝夷奈切通）①、化粧坂切通⑤、極楽寺坂切通⑲では、両地震ともほぼ同様に道路上の崖が大きく崩落したことが確認できた。しかしながら、鶴岡八幡宮から英勝寺・寿福寺に通じる岩谷堂道⑥と、逗子との境にある名越坂切通㉜での被災状況は、元禄地震の方が大正地震を上回っていた。

§4―2　社寺の被災状況

鎌倉の社寺数は、現在、神社が四一、仏教系寺院が一二一である。[39] そして、社寺では元禄・大正両地震での被災状況に大きな差が窺える。なお、江戸時

代は神仏習合の状態にあったので、社寺数などで現状とは実態が合わない部分があり、さらに、境内の状態や建物の規模・構造のほか、諸堂社の新築、あるいは経年劣化の有無など様々な要素も考えられるが、ここでは史料の内容に従った。

・鶴岡八幡宮（雪ノ下）⑦。元禄地震では、石段や石垣、石灯籠、赤橋（現太鼓橋）が崩れたが、社堂など建物被害は軽微であった。それに大正地震では太鼓橋（赤橋）のほか、被害状況写真に見るとおり上宮の楼門や下拝殿が全壊した（紀要5の図8・9）。のち楼門は、復興に際し新材を多用して建て替えられた。[40]

・寿福寺（扇ガ谷）⑧（紀要5の図14）・覚園寺（二階堂）⑩・高松寺（西御門）⑪などは、両地震でともに境内諸堂宇のほとんどが全壊、あるいは大破したと思われる。

・英勝寺（扇ガ谷・⑧の北隣）は、元禄地震では明確な史料がないものの、「御ちしんの間」が境内のいずれかの建物で、さらにこれが同地震直後の建築であったとすれば、同寺でそれなりの被害があったことが推定できる。そして、大正地震での建物被害は激甚であった（紀要5の図15）。

・高徳院（長谷）⑭では、両地震とも同じように台座が崩れて大仏が傾斜したが、どちらの地震でも像身は破損しなかった（紀要5の図23・24）。

・長谷寺（長谷）⑮では本堂とその中の十一面観音菩薩立像は、どちらの地震も被害軽微であった反面、山林は両地震で崩壊した。また、元禄地震では同寺諸堂が被災したという記録はないが、周辺の民屋は全壊。大正地震では本堂以外の建物が全壊し（紀要5の図25）、門前町は民家や店舗等の多くが全半壊したほか、広く焼失した（長谷の全戸数五五三のうち全壊一六一、半壊二〇一、焼失一〇五）。[41]

・光明寺（乱橋材木座）⑳では、両地震とも境内への津波浸水はなかったようである。そして、元禄地震では内藤家の墓所で石塔類の倒壊のほか、同家「浜屋敷」での津波被害が見られたが、境内諸堂宇の地震被害は、本堂が軽微であったこと以外殆ど確認されていない。その反面、大正地震では諸堂宇の全壊や傾斜が著しかった。（紀要5の図21）。

・円応寺旧跡「あら井の閻魔堂」（乱橋材木座）㉓では、元禄地震の際、津波で堂が流されて同地での再建が不能となった（のち建長寺前に移転）。大正地震では、同寺旧跡推定地への津波の浸入はなし。ただし、その付近の材木座三丁目と五丁目にある海抜三m程の範囲では、滑川からの遡上で津波が広く浸水した。[42]

・建長寺㉕と円覚寺㉖（山ノ内）では、建物の構造や配置などの違いは不明ながら、両地震でいずれも諸堂宇や石垣などの被害が甚大であったことが窺える。

§4―3 鎌倉各村（各区）及び近村（近隣地区）の被災状況

・雪ノ下と小町⑬で、津波は元禄地震で二ノ鳥居⑬bまで、大正地震では延命寺橋付近に達した⑬e（図6参照）。民家や建造物の被害としては、元禄地震では民家の一部が破損した程度で火災は無かったが、大正地震では倒壊建物が多く、焼失範囲は広かった（雪ノ下・小町併せて全戸数八六七のうち全壊三五二、半壊二三六、焼失二三四）。[43] また、若宮大路の鳥居は、両地震とも全壊あるいは大破であった。

・山ノ内㉗は、元禄地震では激しい崖崩れのほか、建長寺・円覚寺両門前町の家屋が全て倒壊したが、大正地震では、小袋坂新道以外の崖崩れはわずかで、家屋の被害については記録がない。大正地震の被害は、寺院以外軽微であったと思われる。

・手広（㉝の周辺地域）は、元禄地震では田畑の被害のほかに家屋の倒壊が多かったのに対し、大正地震での被害は一部の家屋のみであった。

・小坪㉞では、元禄地震の際津波で民家が全て流されたとする記録があり、大正地震でも津波の被害が伝えられているので、共に同じ状況であったと考えられる。また、当地は両地震とも崖崩れが激しかった。

・江ノ島㉟と片瀬㊱は、元禄地震では津波によって片瀬村の民家が全壊した。大正地震については、『大正十二年九月一日大震災記念写真帖』に、「地震当時海中に没せりと誤報せられし江の嶋は地盤一帯に岩なりし為め被害比較的軽微なりしも、対岸と連絡の唯一の桟橋は津浪の為めに浚はれて非常なる窮境に陥れり」と、津波被害を伝えた記録がある。(44)

§4―4　液状化現象について

地盤の液状化は、元禄地震では長谷寺（長谷）⑮周辺の谷戸や、円覚寺（山ノ内）㉖の本堂と拝堂の基壇下で発生したという。そして、大正地震では鎌倉小学校（現市立第一小学校）とその周辺のほか、亀ヶ谷坂近くの岩船地蔵堂前でその存在が確認されている。(45)

これら以外にも、両地震ではともに地盤の液状化は存在していたと思われる。さらにここで特徴的なことは、海浜部のみならず内陸部においてもそれが発生していたことである。鎌倉は中世、都市であった。地下には広い範囲で人工地盤が形成されているので、このこととの関係性も考慮すべきであると考えたい。

§5　まとめ

本稿では、元禄・大正両地震における、鎌倉での被災状況を比較した。その結果、両地震の間で次のような差があることが判明した。

・交通要路や社寺等の状況…　切通や道路では、亀谷坂④・名越坂両切通㉜と岩谷堂道⑥は、元禄地震の方が激しかった。また、社寺では建長寺㉕や円覚寺㉖・東慶寺㉘などは両地震とも激甚で、鶴岡八幡宮⑦・長谷寺⑮・光明寺⑳は大正地震の方が激しかった。

・各区（各村）の状況…　山ノ内㉗・手広（㉝の周辺地域）などが元禄地震の方が激甚で、雪ノ下・小町など若宮大路とその周辺地域⑬は大正地震の方が激しかった。

・津波について…　光明寺⑳の門前や円応寺（同寺旧跡）㉓における海岸到達高と浸水域、また川を遡上した津波の到達位置などは、両地震ともにほぼ同程度であった。

・地盤の液状化について…　伝えられた事例は少ないものの、両地震ともに鎌倉各所で存在していたことは確かである。

・現市外の状況…　小坪㉞は、両地震ともに激甚であった。

冒頭示したが、地震の規模とそれによる被害は、元禄地震の方が大正地震よりも大きかったといわれている。しかし、鎌倉では当時における諸堂社の状態やその規模・構造のほか、建物の新築、あるいは経年劣化の有無などの諸要素を鑑みても、地震被害は、場所によって大正地震の方がやや激しかっ

たと推測される。そして、津波の推定規模や浸水域も、地点によって多少違いがみられたが、相対的には両地震とも大きな差はなかったと考えられる。

近年では、両地震の震源域の位置の違いや津波到達高の比較が行われていて、現在までの見解はこれに基づいている。[46] ただし、本稿に記した事例からすると鎌倉での地震規模は、局所的であるにせよ逆のような状況であったと考えるべきであろう。

参考文献

（1）武村雅之 二〇一三『図説 関東大震災の全容』名古屋大学減災連携研究センター 11頁／武村雅之 二〇一七「元禄地震の被害と関東大震災」『過去の災害に学ぶ 39 ―内閣府防災情報のページ』
https://www.bousai.go.jp/kohou/kouhoubousai/h25/74/past.html

（2）伊藤和明・武村雅之 二〇一三「はじめに」「元禄地震の地震像」『1703元禄地震報告書』内閣府（防災担当） 1-13頁
https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/pdf/genroku_light.pdf

（3）浪川幹夫 二〇一三【資料紹介】大正関東地震における社寺被災史料について」『鎌倉市教育委員会文化財調査研究紀要』第五号 55-74頁
https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/rekibun/documents/5namikawa.pdf

（4）前掲註（3）

（5）浪川幹夫 二〇一一・七「元禄地震・宝永富士山噴火と鎌倉」『鎌倉』第一一一号 鎌倉文化研究会 12-32頁／浪川幹夫 二〇一三「第7章 鎌倉方面における元禄地震」『1703元禄地震報告書』内閣府（防災担当） 203-223頁／浪川幹夫 二〇一七「第三章 江戸時代の関東地震 ―鎌倉方面の被害記録から」NAMAZUの会編『新編鎌倉震災志』冬花社 232-279頁

（6）国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース コレクション 書陵部蔵マイクロデジタル変換」256・25 宮内庁書陵部「基熙公記 元禄十六年 別記」4547-4549コマ http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100249255/viewer/4549

（7）浪川幹夫・平田恵美・辻亜紀・萬年一剛 二〇一九「鎌倉における過去の津波について」『鎌倉市教育委員会文化財部調査研究紀要』創刊号 35-52頁
https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/rekibun/documents/kiyou5namikawa.pdf

（8）浪川幹夫・萬年一剛 二〇二三・九『第40回歴史地震研究会 巡検 鎌倉の海岸低地と1703・1923年関東地震 案内書』歴史地震研究会 13-14頁

（9）徳川光圀 一六七四「鎌倉日記〔徳川光圀歴覧記〕」鎌倉市編 一九八五『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』吉川弘文館 70頁

（10）田良道子明甫 一七九七「相中紀行」『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』238-239頁

（11）浪川幹夫 二〇二二・七「光明寺境内諸堂宇の変遷」『記主禅師研究所紀要』第五号 大本山光明寺記主禅師研究所 99-140頁
https://kishuken.jimdofree.com/研究成果-刊行物/

（12）前掲註（11）

（13）大本山光明寺 一九八六『天照山 光明寺』 89-117頁／皆川祥子 一九八六「光明寺」『鎌倉市文化財総合目録 ―書跡・絵画・彫刻・工芸篇―』鎌倉市教育委員会 294-316頁

（14）前掲註（6）

（15）澤壽郎 一九七六「玉舟和尚鎌倉記」鈴木棠三編『鎌倉古絵図・紀行 ―鎌倉紀行篇』東京美術 17-31頁

（16）自住軒一器子 一六八〇「鎌倉記」『鎌倉市史 近世近代紀行地誌編』106-137頁

（17）澤壽郎編 一九六七『鎌倉近世史料 乱橋材木座村編』鎌倉市教育委員会 200-201頁

（18）前掲註（7）（8）

（19）斉藤建設 二〇二〇『神奈川県・鎌倉市 材木座町屋遺跡（№261）発掘調査報告書 ―材木座五丁目九四六番一地点―』111-113頁

（20）関口欣也 一九八七「27 寿福寺仏殿」鎌倉市教育委員会編『鎌倉市文化財総合目録 ―建造物篇―』同朋舎出版 484頁

（21）関口欣也 一九九六・三「水戸様御地震間仕用」『生活文化史』二九号 日本生活文化史学会 104-105頁

（22）「新編鎌倉志 巻之四」一九九八『大日本地誌体系㉔ 新編相模国風土記稿』第六巻 雄山閣 84-86頁

（23）浪川幹夫 二〇〇四「河内家と英勝寺」『鎌倉』第九九号 鎌倉文化研究会 31-56頁

（24）川崎一朗・小松原琢・須田達・岡田篤正 二〇一一・七「彦根城楽々園『地震の間』の地震学的環境」『歴史都市防災論文集』Vol.6 立命館大学歴史都市防災研究所 297-304頁 https://ritsumei.repo.nii.ac.jp/files/dmuch6_h1

（25）大森順雄 一九六五「朝祐仏師考・覚園寺造立並に修造次第（二）」『鎌倉』第一四号 鎌倉文化研究会 27-29頁／覚園寺 一九七四『覚園寺 国指定重要文化財木造薬師三尊・神奈川県指定重要文化財木造十二神将立像 修理報告書』27頁

（26）鎌倉国宝館 二〇一五『特別展 鎌倉震災史 ―歴史地震と大正地震―』107頁

（27）前掲註（25）
（28）覚園寺 一九八六『覚園寺』107頁
（29）前掲註（5）
（30）鎌倉市教育委員会文化財保護課 一九九三『鎌倉近世史料 手広編（六）和田家（下）内海家（補遺）』鎌倉市教育委員会 260－261頁
（31）覚園寺 一九八一『神奈川県指定重要文化財 旧内海家住宅移築修理工事報告書』30－31頁
（32）久保木実 二〇一一「〈連続講座〉元禄大地震の被害記録」『三浦半島の文化』第二一号 三浦半島の文化を考える会 2－9頁
（33）鎌倉町編 一九三〇『鎌倉震災誌』鎌倉町役場〔国立国会図書館デジタルコレクション〕79－111頁 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1464097
（34）前掲註（33）
（35）前掲註（3）
（36）福田誠 二〇〇一『神奈川県 鎌倉市 鎌倉大仏周辺発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 6－24頁
（37）福田誠二〇〇二『神奈川県 鎌倉市 鎌倉大仏周辺発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会 7－21頁
（38）前掲註（31）
（39）鎌倉市二〇一七『鎌倉の統計』平成二十九年版 https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/soumu/toukei/kamakuratoukei/top2/documents/29toukeisho-111309575 8.pdf
（40）文化財建造物保存技術協会編 二〇〇四『鶴岡八幡宮楼門保存修理工事報告書』鶴岡八幡宮 22－43頁
（41）鎌倉歴史文化交流館 二〇一九『写真集 Kamakura Disaster 災害と復興 ―土地に刻まれた痕跡―』64－166頁／前掲註（33）
（42）前掲註（41）
（43）前掲註（33）
（44）桝井照蔵編 一九二五『大正十二年九月一日大震災記念写真帖』神奈川県震災写真帖頒布事務所（非売品）〔国立国会図書館デジタルコレクション〕19コマ https://dl.ndl.go.jp/pid/966764/1/19
（45）前掲註（41）
（46）前掲註（2）

〔付録史料編〕

(1) 元禄十六年十二月『江戸状案詞』（明治大学博物館蔵『内藤家文書』）

（十二月五日 書簡写）

（表紙）

元禄十六癸未歳十二月

江戸状案詞

平野又右衛門（中略）

（本文・別筆）

□□（申候）、鎌倉筋ゟ道中夥敷破損、戸塚新町抔〈不残家禿（頽）」大勢死人茂有之由飛脚之者申候由、可被承知候、以上、

（本文）

去月廿六日之御状被拝見候、然者地震ニ付、」鎌倉 御廟所之御様子為御聞ニ、鎌倉〈先」飛脚被遣候処廿五日之晩罷帰候、鎌倉之」儀茂夥敷地震ニて御廟所御石塔胴」石者無恙、九輪落、地盤石其外損申候、」玉垣幷石燈籠不残倒申候、 御霊屋・」唐門共別条無御座候由、

一御霊屋御本尊観音御手少損シ、」 御位牌茂少宛損申候由、

一書院茶之間・台所共禿（頽）申候、且亦浜屋」敷茂致破損候由、

一地震之節、津浪ニて浜屋敷前〈獵船」弐艘押上ヶ浜屋敷之長屋〈当り致破」損候、塩畳ゟ一尺程上り申候、右之通ニ」御座候由申越候、委細ニ者相知不申候、」廿五日之朝茂見分ニ山下新右衛門御申付、」普請方之者御差添鎌倉〈被遣候由、疾々」見届参候様ニ御申含候間罷帰、委細之」儀者可被仰上候、右之趣可申上旨、

一光明寺本堂損、其外寺内致□□（破損カ）」有之候由ニ御座候、
一廿五日之晩光明寺ゟ地震之儀ニ付御使」僧被遣、　御廟所御破損之御届□□（御見）」
舞旁各迄被仰越候、此旨可申上由」目積を以御礼可被仰遣旨」令承知、則
右之段達　御耳候、恐惶謹言、

十二月五日　　四人

伊織様（松賀伊織・上田五郎兵衛）・五郎兵衛様　　文左衛門（原文左衛門カ）

四人様　　主馬（堀主馬）

善兵衛

又右衛門（平野又右衛門）　（中略）

（十二月十三日　書簡写）

一去五日之御状令拝見候、然者、先達被」仰上候通鎌倉御廟所為見分、山下
新右衛門」御普請方之者御差添被遣候処、御廟」所見分仕罷帰候、夥敷御
破損候て御座候□（所）」御石塔・御戒名御座候、地盤石之分者」恙無御座、其
外九輪・笠石・胴石落所々」損申候、玉垣過半、御石燈籠不残顚」損申候、
御廟所之後石垣はらミ所々」落申候由、
一御霊屋・唐門共ニ無御別条、少宛損」申候由、
一御書院茶之間・台所不残禿（頽）、戸障子」以下悉被損御用立不申候由、右御石
塔」其外絵図ニ被成御差下候由、
一御霊屋御本尊観音□□外、古仏・」御位牌少々つゝ損申候□（由）、
一内御仏檀御本尊阿弥陀其外古仏、」少々つゝ損申候由、
一御仏具不残損申候由、
一方丈之仏檀ニ御座候　御位牌之分ハ」御恙無御座候由、
一浜屋敷之家過半伏懸リ大破ニて」御座候由、右之通新右衛門致見分罷帰□（候）、」
右之趣可申上旨令承知、則達　御耳候、
一右之通伊織殿・五郎兵衛殿へ　被仰談候、」伊織殿思召候ハ御仏　御位牌
所」之分ハ繕、御霊や（屋）・唐門右之分年内」修覆仕、　御廟所御修覆之儀者」
来春ニ至被　仰付可然候、此節　御城」廻・春外・御屋敷方御破損夥敷儀」
御座候へ者、石切等殊之外不行届罷」成候、御見合来春ニ御差延被成候様
ニ申」上候様ニ可被仰遣由、伊織殿御申事ニ御座候、」各遂相談達　御耳候
様ニと思召候、」御修覆之儀鎌倉ニて新右衛門・石屋共」為積申候、御石塔
損候所たゝき直し、」ちゝめ候様ニ仕置、又不被用候分ハ新」規ニ取替、春
外玉垣・石燈籠も石削、」同前ニ為積申候、其上ニて茂為御積候所」取早年
内余日無御座、其上寒気ノ」節ニ候へ者はかし不参候、年内ハ御」差延可
然（與）石屋共も申事ニ御座候、」尤相窺被　仰遣候趣可申入旨被」仰聞、御図
面之趣令承知、則御図面以」相窺候処其元ゟ被仰上候通　御仏・」御位牌
之分此節繕申付、御霊屋・」唐門茂年内致修覆候様ニ可申遣旨」御意御座
候、尤御廟所御修覆之儀も」御延引被成候而とも不可然被　思召候間、来」
正月中早速取付修覆可申付旨」被　仰出候、惣而御霊屋・御廟所共ニ」御
修覆延引不仕候様ニ可致旨　」御意ニ御座候間、右之趣伊織殿へ茂」被仰談、
段々御修覆被仰付候様ニ可」被成候、恐惶謹言、

十二月十三日　　三人

四人様

（中略）

去十八日之御状召上再給令拝見候、然者、」鎌倉　御廟所御破損之義先達
而被　仰出候」趣相窺、被　仰出之趣委細申入候処」御承知被成、図面伊
織殿へ被掛御目、」先達而御仰上候通　御仏・御位牌繕、」御霊屋幷唐門之
義ハ取早御修覆取」□□（掛候）段被出来候分申候、　御廟所御修覆」之儀、是ハ

此間石屋両人江戸ゟ被差遣」見分御申付候、十八・九日之内罷帰ても」見分仕様いたし可参候間、追而様子」可被仰上候、尤正月中、取付御修覆」為致候様ニ可被成候、右之旨可申上旨令承知、」則達　御耳候、恐惶謹言、

十二月　　三人

三人様

(2) 享保八年　木造深誉上人坐像内納入文書　　光明寺蔵

（第一紙）

中興深誉上人ノ寛永五辰年自影三月十四日造立也、此上人同四年卯四月十五日ニ

（中略）

金色三尊再興自筆意趣書之写在于此裏但坐光之新造ナリ是歳享保八癸卯五月加厳飾、依之記主ノ作ナルコト分明ニ知ル者ノ也、凡歴」四百六十有七年也、委悉如別記□上人影再興、卯九月朔日功了、施主学誉

（第二紙）

天照山ノ三尊ハ金色之三尊ト言伝エ、且又誰ノ之造トモ不レ知也、惜哉元禄十六癸未年羅二大地震ノ変ニ一及二虧損一也、而トモ開山」尊影・白籏等、弁天・善導等修復新建ス、依之延引ス、不得黙止　三尊ニ加修飾、像中之願文拝スニレ之記主一代」四十八躰造立取初之　尊容ナリ、自筆ノ之謄如別記在千仏前、　且ツ深誉坐光再興ノ意趣其文ニ云、（中略）

于岩寛永四年四月　　深誉敬白　　右一封ニ而タリ、本尊腹内ニ納

（中略）

再立中興五十七主　嘉影像修飾畢　処享保八癸卯七月施主　冏鑑敬白

(3) （年月日未詳）水戸様御地震の間仕用　　個人蔵（図3）

一間ハ六尺三寸ノ間

御ちしんの間仕用

□□□

一ノキノタカさ壱丈壱尺」壱寸八分、けた上ハまて（軒）（高）（桁）

一上や柱長さ壱丈五尺」九寸ちまわり上ハ迄（屋）（地回り）

一ゑんノタカさ石ノ上ハより」いた上ハまて三尺（縁）（板）

一戸内のり五尺六寸

一ゑん天井タカさいた」上ハより七尺四寸六分天井」いた下ハまて（縁）

一入かわ天井タカさ」いた上ハより八尺四寸六分、」天井いた下ハまて（側）（板）

一大柱ノせイ七寸二分

一中柱ノせイ六寸二分

一ゑんかわノ柱ノせイ五寸六分（縁側）

一大引七寸

一あシかためいたは物」たけ五寸五分下ハわ」柱ニひシつらあるやうニすへシ（足固）

一□タたけは四寸、」下ハ三寸壱間ニ弐本ウち

一いたあつさハ七分（厚）

一ぬ木下ハ壱寸六分、」たけハ五寸五分（貫）

一ぢまわり上や大」けた下六寸二分たけ」六寸天井上へ□物下ハ六寸二分（地回り）（屋）（桁）

たけ」七寸八分

一ノキ長さハかやヲイ」外ノつらまて三尺」九寸（軒）（茅負）（面）

一たる木下ハ二寸壱分、」たけ二寸五分（垂）

一ひろこまい下ハ三寸」六分、たけ二寸壱分（広小舞）

一こまい（小舞）下ハ壱寸六分、」たけ壱寸壱分
一すミ（隅）木下ハ四寸二分
一ノキ（軒）ノけた下ハ五寸」六分ニして内のかた」ゐ四分あます、外ニ」柱びつ
つら四分あり、」たけハ中すミにて」六寸口わきにて五寸」四分
一ノキたる（軒垂）木こはい（勾配カ）ハ二寸」四分
一シキイあつさハ二寸
一かもい（鴨居）あつさハ壱寸八分
一戸のふちハ壱寸二分
一なけし（長押）たけハ五寸」五分、丸なけし
一天井なけしたけ」五寸二分、丸なけし
一天井ふち（縁）たけ壱寸」四分、下ハ壱寸八分、」同ぬりふち
一まわりふちたけ壱寸八分
一いた（板）ハまさいた（柾板）
一ゑんかわ（縁側）ハむきいた
一入かわ二ちういた（二重板敷）シキ、」下ハくりいた上ハひの木（檜木）、」ひの木いた（板）ちかい（違）」
はき（矧ぎ）
一天井上同ゑん下」十もんぢすちかい（文字筋違）」入
一ゑん下内外ぢなけし（地長押）くり六寸」かくにて丸なけし（長押）入、同ゑん下」戸あり
一こやのきノけた上ニ」のけた（野桁）あり、同」六尺三寸ノ内ニはしらはさミ」同
もやのけたあり、」何もきのせイハ三寸」二分つゝ
一壱間ノのほり物あり、」木のせイ下ハ三寸四分、」たけ三寸八分
一入かわ（入側）くわ志やう」あり、下ハ三寸四分、」たけ三寸八分、くミ」やうハ
むね（棟）のつかほそ（束臍）、」むね上ハまてひらほそ（平臍）」にて、とうり申やうニ」くミ
一入かわ七尺七寸八分ノ」間也、中ノけた」あり、けたもつかも」三寸二
分ノすミも」三寸四分
一むねノたけ下ハ」四寸六分四本なり

（欠損）

一ゆゑん（油煙）出し満戸（まど）、」あかかねあミ（銅網カ）」□
一とこおとしけた（床落し桁）下ハ四寸二分、」たけ三寸五分、」たかさハなけし上ヲお
とし」けた下ハニスベシ
廻わかまち（輪框）なけし（長押）」五寸五分

□とし
コレ、水戸様ちしんノ間

（以下、欠損）

(4) 宝永元年　薬師如来坐像内修理銘　覚園寺蔵

此薬師・日光・月光・十二神将者北条右京兆義時蒙於」戌神伐折羅之瑞応而、乃令仏工運慶作之焉、尊像已」成于建保六年事見于縁起　自尓以来四百七十六年値于元禄」十六年仲冬廿二日夜」大地震、爾時殿碣涌浸、須弥傾動日光・月光亦其光跌共堕地、破余尊像等亦皆多損遂、宝永」改元之暦自孟夏始修補迄仲秋悉成功者也、（裏面略）

(5) 宝永四年　月光菩薩光背芯裏板墨書銘　覚園寺蔵

奉寄進」月光菩薩光燄華実形一面」三橋左京重信自手作之」以祈現当二世利楽者也」于時宝永四年丁亥八月廿八日」住持沙門璇室叟心敞　誌焉

(6) 宝永五年　住吉明神社棟札　　覚園寺蔵

（前略）時宝永五年戊子十一月斗宿廿六日尾宿戊刻奎宿（裏面略）

(7) 享保十六年　地蔵堂棟札　　覚園寺蔵

相模国鎌倉郡鎌倉之内二階堂鷲峰山覚園律寺」地蔵大菩薩霊堂三間四面一宇　宝永八辛卯二月十七日造営上棟」空輪露盤一樸　享保十六歳辛亥四月二十一日建立上架（裏面略）

※(4)～(7)…大森順雄　一九六五「朝祐仏師考・覚園寺造立並に修造次第（二）」『鎌倉』第一四号　鎌倉文化研究会　27～29頁

(8) 宝永三年正月「畑方金納願書」　　個人蔵

一地震以後出水すき、□（水カ）とまり、荒地ニ罷成候、

(9) 宝永三年九月「差上申証文之事（畑方金納請書）」　　個人蔵

一当村之義、拾三年已前ゟ藤沢宿定助郷伝馬役新規ニ相勤候ニ付、連々困窮仕候、其上近年打続不作仕候故、村必至と差詰り、迷惑至極仕候ニ付、畑方金納ニ奉願候処聞召被為御座、願之通り被仰付、難有奉存候、

(10)『新編相模国風土記稿』（不動堂の項）

（前略）本円寺持、堂辺滝あり高一丈七尺、幅三尺、不動滝と唱ふ、水田に灌漑す元禄の末、水涸て用水に乏しかりしに、宝永四年本円寺住僧日進、陀羅尼品を読誦して祈誓す、依て水旧に復すと云、

(11) 宝永五年「御救金割合覚」の書入れ　　個人蔵

元禄十六年未ノ十一月二十二日ノ夜半ニ大地シン、山クツレ、タニ埋、家ツブレ、大ツナミクガ一里程迄ヲシ入候、

(12) 宝永四年「客殿建替のため請取申松材之事」　　東昌寺蔵

右者未ノ年大地震之時分客殿破損□ニ付、今度長七間横六間四方へるきニ作り替申ニ付自力ニ難成御座候間、

※(10)～(11)…久保木実　二〇一一「〈連続講座〉元禄大地震の被害記録」『三浦半島の文化』第二一号　三浦半島の文化を考える会　2-9頁

(13) 内海家住宅ヒロマ上部の大梁枘墨書銘　　個人蔵

宝永三戌二月十五日柱立　但シ前年十一月廿二日（以下略）

(14) 内海家住宅大正関東地震被災修理墨書銘　　個人蔵

（床板裏面墨書銘）

大正拾弐年九月壱日　午前拾壱時伍什分　関東大震災ニヨリ家屋半潰修理ス　内海鉄之助　大工藤沢町　杉本金平

（床脇天袋天板墨書銘）

大正拾弐年九月一日　午前拾壱時伍什分関東大震災ニヨリ家屋半潰ニツキ之ヲ修理ス　内海鉄之助　鳶浜松□□平　大工藤沢杉本金平

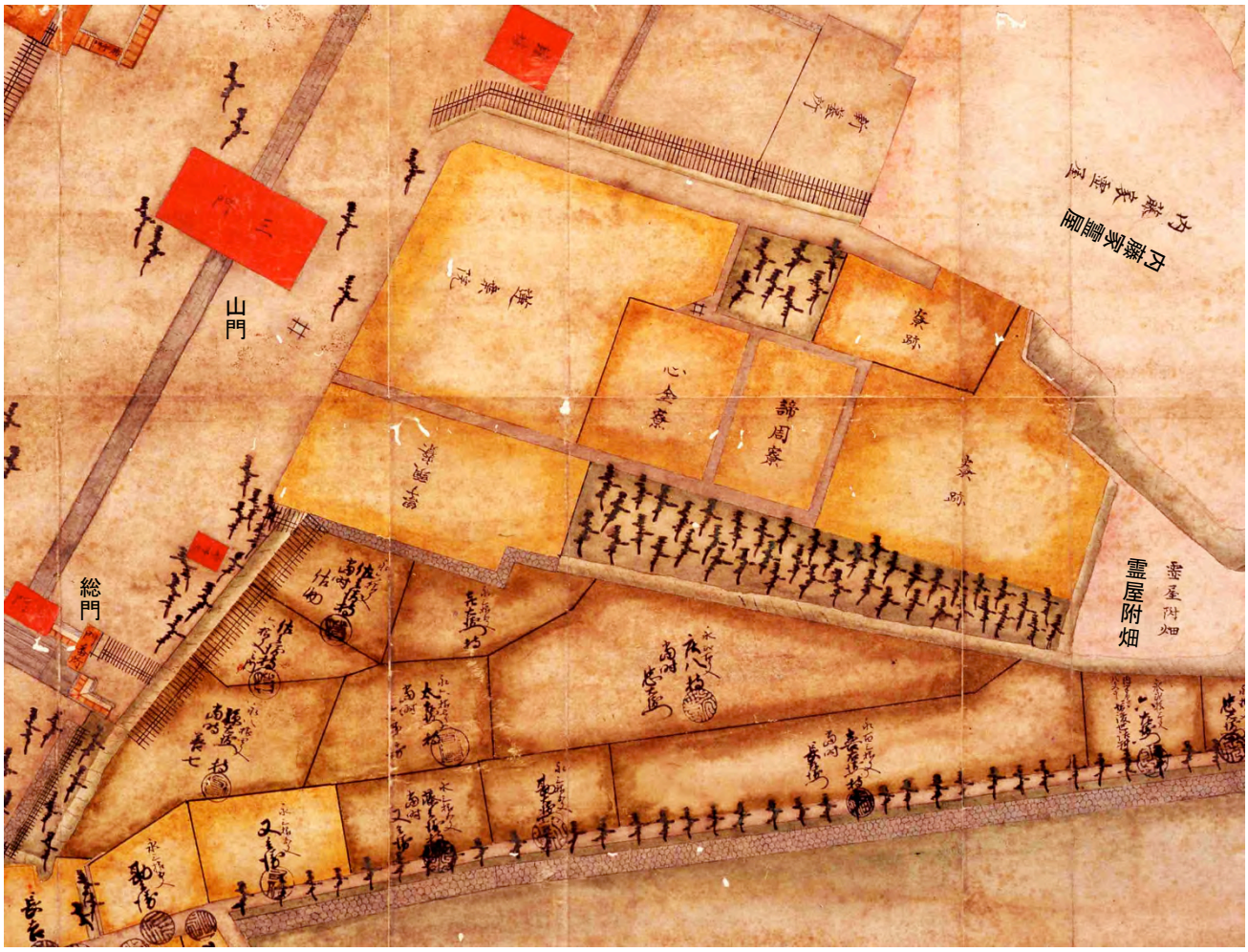

図１　光明寺境内図　嘉永３年（1850）　光明寺（部分）

図２　内藤家「浜屋敷」推定位置図
（●が推定地）

地理院地図（電子国土 Web）より
http://maps.gsi.go.jp/#5/35.362222/138.731389/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0

図３　水戸様御地震の間仕用（年月日未詳）　個人（市指定文化財）

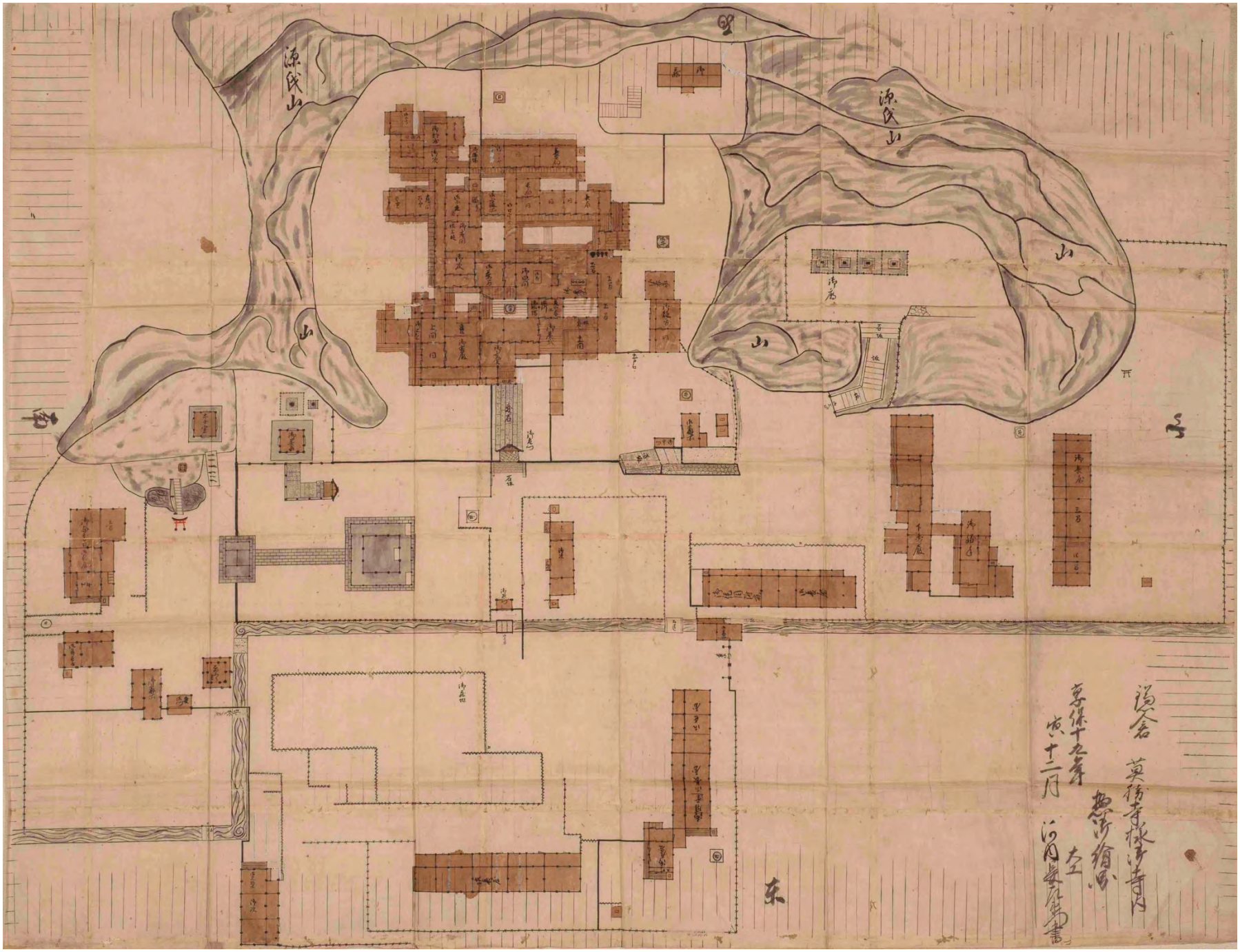

図４　鎌倉英勝寺様御寺内惣御絵図　享保 19 年（1734）12 月　個人（市指定文化財）

図５　鎌倉の元禄・大正地震の記録・史料所在位置図（地図には、主な地名や社寺の名称等を記載した）
地理院地図（電子国土 Web）
http://maps.gsi.go.jp/#5/35.362222/138.731389/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0

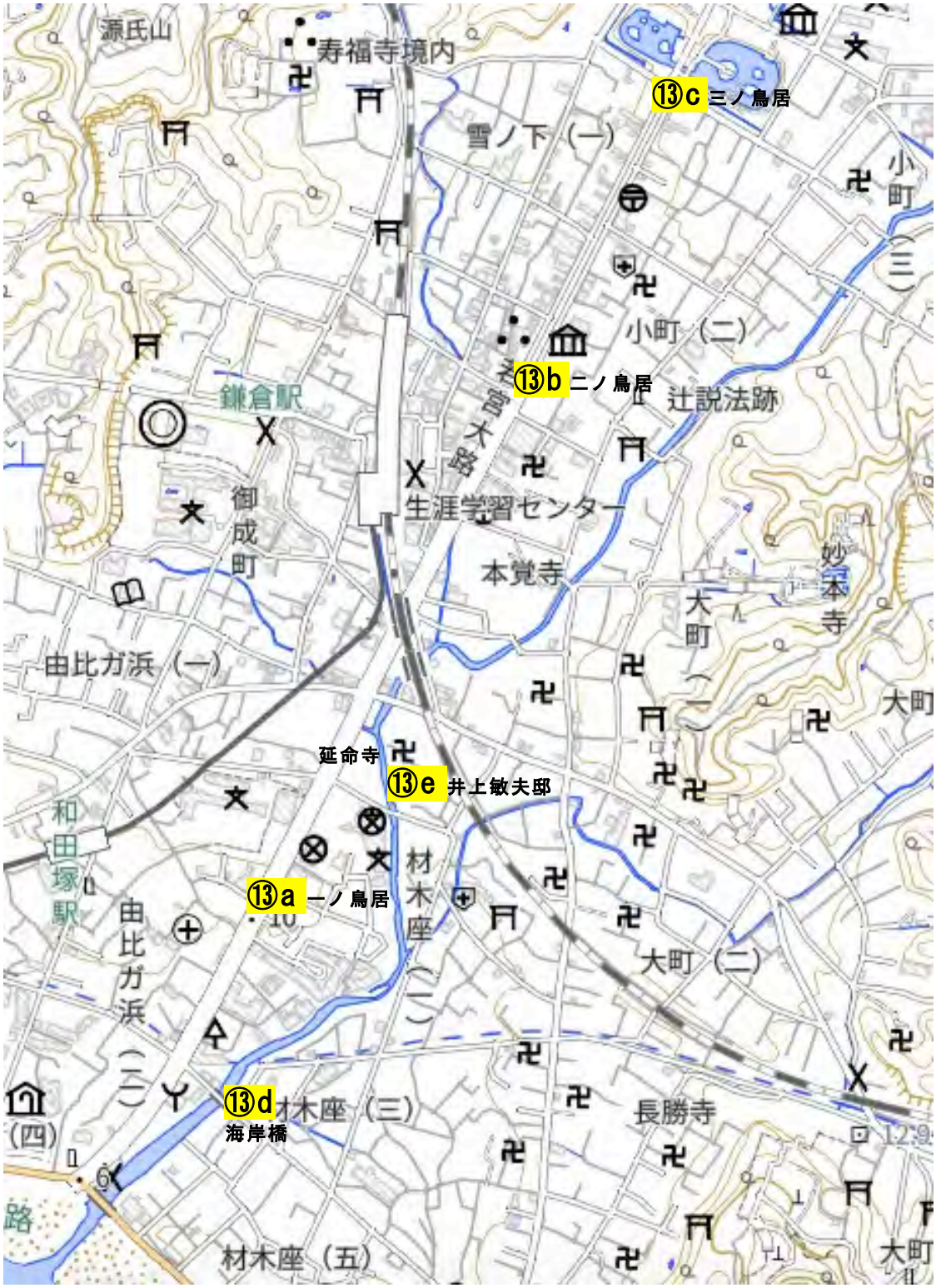

図６　鎌倉の元禄・大正地震の記録・史料所在位置図（若宮大路周辺の拡大図）
地理院地図（電子国土 Web）
http://maps.gsi.go.jp/#5/35.362222/138.731389/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f0

〔別表〕

〔資料〕鎌倉における元禄・大正地震の主な被災記録から

①～㊱は、本稿「鎌倉の元禄・大正地震の記録・史料所在位置図」の番号
（　）内は現在の地区名称及び註記等　〔　〕内は出典史料

元禄地震	大正地震
切通と道路の被災状況	
峠坂切通（朝夷奈切通） ① ・長さ約 67mが崩壊した。〔楽只堂年録〕	朝夷奈切通 ① ・山の崖が崩れて交通が途絶え、泉水橋際では亀裂を生じて橋が崩落した。なお、これは旧道のこと。新道は昭和 31 年（1956）９月の開道である。〔鎌倉震災誌・図説鎌倉年表〕
小袋坂切通 ② ・長さ約 110mが崩壊した。〔楽只堂年録〕 ・鶴岡八幡宮に参る道に小坂がある（小袋坂旧道）。左右共に崩れて往来が困難なため、木の根に取り付いて這い上がった。〔祐之地震道記〕 ・鶴岡八幡宮北の入口の黒門が顛倒した（小袋坂旧道口辺りか）。〔祐之地震道記〕	小袋坂新道③（当時旧道②は、すでに寸断されていた）と亀ヶ谷坂④が崖の崩壊で不通となった。山ノ内方面との通行はおもに鉄道の扇ヶ谷トンネルが利用された。〔鎌倉震災誌〕
亀谷坂切通 ④ ・長さ約 255mが崩壊した。〔楽只堂年録〕	・仮粧坂（化粧坂）⑤や亀ヶ谷坂④は崖が崩れ通行できなくなった。
化粧坂切通 ⑤ ・長さ約 180mが崩壊した。〔楽只堂年録〕	・亀ヶ谷坂近くの岩船地蔵堂前では亀裂を生じて水が噴出した。この状態は約２年間続いたという（液状化現象か）。〔鎌倉震災誌〕
岩谷堂道 ⑥ ・長さ約 35mが崩壊した。〔楽只堂年録〕 ・岩窟「窟不動」（現存）と、鶴岡八幡宮寄りの「松源寺」（現鎌倉市川喜多映画記念館）との間で大規模な崖崩れがあった。現在もこの場所に大岩が残留する。これは当時の崩落痕跡か。〔英勝寺・鶴岡八幡宮領境界図〕	岩谷堂道 ⑥ ・寿福寺⑧の門前から鶴岡八幡宮⑦に向かう、鉄井戸までの道沿いは比較的軽微であった。〔鎌倉震災誌〕
大仏坂切通 ⑱ ・長さ約 550mが崩壊した。〔楽只堂年録〕	県道大仏坂（旧切通の下）⑱ ・大仏門前の崖が崩落し、トンネルは反対側の深沢口が崩れたが、軽微であったため町外とは早期に通じた（当時旧道は不通であった）。〔鎌倉震災誌〕
極楽寺坂切通 ⑲ ・長さ約 160mが崩壊した。〔楽只堂年録〕	極楽寺坂 ⑲ ・北側の崖から虚空蔵堂の山にかけて崩壊し、道路は深さ約３～６ｍ埋没して通行が遮断された。坂の東口の住宅で小児が１名圧死した。〔鎌倉震災誌〕
名越坂切通 ㉜ ・長さ約 180mが崩壊した。〔楽只堂年録〕	名越坂切通 ㉜ ・切通の被害は比較的軽微であったので、早く復旧した。 ・名越踏切（現ＪＲ横須賀線）からトンネルまで約 327mの間で亀裂を生じた。また、坂の両側が崩壊し、トンネル入口の上も崩れて大量の土砂が線路上に落ち、一時列車の運行を阻害した。〔鎌倉震災誌〕

社寺の被災状況	
鶴岡八幡宮（雪ノ下村）⑦ ・鶴岡八幡宮では、石階段が上宮楼門より下まで半分破損したほか、社堂全てで石壇がずれた。〔基熙公記〕 ・同宮本社（上宮の建物）では羽目板がずれたが、建物はさほど傾斜しなかった。 ・神前の石段と石の玉垣はことごとく崩れた。 ・中門（楼門か）の前の石灯籠と鉄灯籠も残らず倒れた。 ・中門の前の、幅約９ｍ、長さ約 36mの石段が列を乱したように崩壊した。その両脇に、高さ約 18mの石垣があって、それは原形が無くなるほどに崩れていた。 ・境内の舎屋が破損した。 ・石の輪橋（赤橋（あかはし）か）が壊れて通行が途絶えた。 〔祐之地震道記〕 ・鶴岡八幡宮十二院⑨のひとつ最勝院で客殿が転倒して庫裏（くり）のみ残り、その庫裏も正徳４年（1714）に破却された。〔鶴岡八幡宮寺諸職次第〕	鶴岡八幡宮（雪ノ下）⑦ ・太鼓橋（赤橋）、楼門、下拝殿、末社白旗神社の拝殿等が全壊した。 ・石灯籠６対が倒れた。 ・本殿・拝殿・若宮（３棟共現重要文化財）と、末社白旗神社本殿（現市指定文化財）等は小破であった。 ・源平池の護岸や大臣山が崩壊した。 ・上宮前の石段は一部陥没したのみであった。 〔鎌倉震災誌・前掲註⑶〕 ・鶴岡八幡宮十二院⑨は明治維新後廃絶。被災記録なし。
寿福寺（扇ヶ谷村）⑧ ・現仏殿は大正地震で倒壊し、修復時に組子古材から発見された古記と、歴代過去帳の第 94 世法山禅演の註記から、正徳４年（1714）の建立と推定された。この建物は、元禄地震後の再建だろうか。〔本稿〕	寿福寺（扇ガ谷）⑧ ・山門・中門・通用門・庫裡が全壊した。 ・本堂（現市指定文化財）は「九分以上傾壊」。仁王立像破損。 ・崖が広く崩れた。 〔鎌倉震災誌・前掲註⑶〕
英勝寺（扇ヶ谷村）**⑧の北隣** ・地震後、「御ちしんの間」が建築されたか。境内の被災状況は不明。〔本稿〕	英勝寺（扇ガ谷）**⑧の北隣** ・山門・宝蔵・庫裡・長屋・惣門が全壊した。山門は復旧不能として売りに出され、実業家間島弟彦が購入し小町の別荘に移築した。現在は、同寺境内に復興されている。 ・本堂・御霊屋・同拝殿は傾斜であった。 〔鎌倉震災誌・前掲註⑶〕
覚園寺（二階堂村）⑩ ・仏殿をはじめ堂宇が傾動して大破し、尊像が破損したので、宝永元年（1704）夏より秋にかけて修理された（薬師如来及び両脇侍坐像・十二神将立像の修理）。なお、薬師堂諸尊像の修復完了には数年が要された。 ・心慧智海坐像が宝永元年８月９日に再興された。 〔本稿〕	覚園寺（二階堂）⑩ ・地蔵堂が全壊し、仏殿・不動堂・祖師堂が半壊した。 ・本尊薬師如来及び両脇侍坐像・十二神将立像・地蔵菩薩立像（３件とも現重要文化財）ほか仏像が多数大破した。 ・崖が４ヶ所崩れた。 〔鎌倉震災誌・前掲註⑶〕
高松寺（西御門村）⑪ ・客殿・庫裏・座敷が残らず倒壊した。 ・本堂が大きく傾いた。 ・宝永元年、庫裏と客殿が復興した。 ・同４年、本堂・鐘楼・客殿・土蔵等、境内諸堂が再興した。〔寿延山年譜〕	高松寺（西御門）⑪ ・本堂・庫裡・門が全壊した。 ・地震後廃絶した。 〔鎌倉震災誌〕

宝戒寺（小町村）⑫ ・近在の同寺領「名越」「名越谷」「屏風山腰」等で、被災後に年貢高の割引が行われた。〔地震引ヶ水帳〕 ・境内の被災状況は不明。	宝戒寺（小町）⑫ ・本堂・客殿・太子堂・山王社・稲荷社・総門が全壊した。 ・地蔵菩薩坐像・歓喜天立像（共に現重要文化財）ほか仏像数軀が破損した。 ・山林が崩壊した。〔鎌倉震災誌・前掲註(3)〕
高徳院（長谷村）⑭ ・大仏の「台座石段後ノ高サ」が約 2.7m、「同前ノ高サ」が約 1.8mとなり、台座前方の「石壇」も崩れて、像が 0.9mほど下に傾いた。 〔長谷村浄土宗高徳院大仏鑄掛修復托鉢願日鑑〕	高徳院（長谷）⑭ ・鎌倉大仏（国宝銅造阿弥陀如来坐像）は台座前方（南南東）が約 35 ㎝、右後側が約 10 ㎝沈下して約 40 ㎝前にせり出した。 ・庫裡は全壊し、仁王門は礎石よりはずれて約 60 ㎝南方に移動した。 ・寺務所や二階建て客室等が全潰し、仏像７軀（大仏胎内本尊・観音・内仏本尊３体・地蔵尊２体）が大破した。 ・翌大正 13 年１月 15 日の強震で、鎌倉大仏は像全体が 30 ㎝ほど後退した（神奈川県西部地震〔丹沢地震〕・M＝7.3）。 〔鎌倉震災誌〕
長谷寺（長谷村）⑮ ・同寺周辺⑯で民家の全滅と多くの死者が出、寺がある谷戸（やと）で山が崩れたほか、水が噴出した（液状化現象か）。 ・境内では観音堂内陣正面の大扉１枚が本尊十一面観音立像の前立（まえだち）の像側に、もう１枚が開山像の前に落下し、その他の像も皆倒れたが指１本も損じなかった。 ・両扉に連なる像は損壊した。 ・境内で死者が出た。 〔相州鎌倉長谷寺観音大士記〕	長谷寺（長谷）⑮ ・観音堂が大破して傾斜し、東南方向の側柱が約 30 ㎝沈下した。 ・堂内の十一面観音菩薩立像は前方に傾き、扉上の虹梁に額を支えられて倒れず小破した。 ・鐘楼・阿弥陀堂・大黒堂・仏殿・念仏堂・書院・庫裡が全壊した。 ・仏像 20 軀が大破した。 ・山林が数ヶ所で崩壊した。 ・門前町で火災が広範囲に及んだ⑯。 ・坂ノ下や長谷駅・旧由比ヶ浜駅に津波が襲来した⑰。 〔鎌倉震災誌・前掲註(3)〕
光明寺（乱橋材木座村）⑳ ・本堂の天井の楔が緩んだ。 ・旧阿弥陀堂の本尊阿弥陀三尊像（現当山本尊）が地震で破損し、その後享保８年（1723）に修理された。 ・内藤家墓所の石塔は頂部の九輪のほか笠石と胴石が落下し、土台の石などが破損。石造位牌の損傷も激しく、石灯籠は残らず倒壊した。そして、墓所の玉垣は過半がはらみ、石が落ちた箇所があったが、墓所に附属する御霊屋と唐門は少損したのみであった。 ・同家御霊屋内部で本尊観音菩薩像の御手が少損したほか、同家の位牌も少損であった。 ・同家書院の茶の間と台所は全壊。 ・内藤家の「浜屋敷」では、津波で漁船が２艘打ち上げられて同屋敷の長屋を破損した。そして海水は、屋敷で畳の上 30 ㎝ほど上がった。 ・同寺境内に津波が入ったというが定かでない。山々も揺り崩されて破損した。〔本稿〕	光明寺（乱橋材木座）⑳ ・大方丈・庫裡・二尊堂・経蔵が全壊した。 ・本堂・総門・開山堂は大破し傾斜した。 ・本堂の内部は全壊した。 ・山門は北西に 50 ㎝程ずれた。 ・境内山林５ヶ所が崩壊した。 〔鎌倉震災誌・前掲註(3)〕 ・津波は同寺門前から総門前まで浸入した。 ・同じく補陀洛寺門前㉑までが浸水した。 ・同じく豆腐川での遡上により正田別邸㉒までが浸水した。 〔鎌倉震災誌〕

円応寺（乱橋材木座村）㉓ ・材木座所在の「あら井円応寺ゑんま堂」が津波で大破した。 ・円応寺は、江戸時代前期の『相州鎌倉江之島図』には、閻魔川の西側に描かれる。ただし、元禄地震後も同河川の流路は変更なし。〔本稿〕	円応寺旧跡付近（乱橋材木座）㉓ ・現鎌倉市材木座三丁目と五丁目にある海抜３mの範囲では、津波が川の遡上により広く浸水した。 ・旧跡推定地には浸水しなかった。 〔鎌倉震災誌・前掲註(8)〕
円応寺（山ノ内村）㉔ ・同寺が山ノ内に移転した時期は、宝永元年７月 30 日以降であった。〔本稿〕 ・現在の寺地は、もと建長寺の塔頭大統庵もしくは大智庵の跡地か。〔建長寺境内図［延宝６年］〕	円応寺（山ノ内）㉔ ・本堂・庫裡が全壊した。 ・現国重要文化財の木造閻魔王坐像・倶生神坐像・初江王坐像ほか仏像 12 軀が破損した。 〔鎌倉震災誌〕
建長寺（山ノ内村）㉕ ・境内諸堂宇が大半破損した。〔基熙公記〕 ・門が傾き塀や石垣は全て崩れた。 ・境内で堂１棟が埋没した。 ・方丈は傾斜した。 ・拝堂内の仏壇が崩れて本尊が落下した。 〔祐之地震道記〕 ・同寺の塔頭「正統菴」（現正統院）の山が崩れて「常寂堂（塔）」が埋没した。 〔高峰顕日坐像像内納入銘札〕。	建長寺（山ノ内）㉕ ・現重要文化財の山門は大破したが、法堂（はっとう）とともに倒壊を免れた。 ・現重要文化財の仏殿・唐門・昭堂をはじめ、書院・客殿・庫裡・鐘楼・禅堂・宝蔵・総門・西来庵・半僧坊本殿等が全壊した。 ・塔頭の天源院・正統院・宝珠院・龍峯院・回春院・禅居院・同契院等の建物が倒壊した。 ・木造北条時頼坐像や須弥壇（共に現重要文化財）、仏殿本尊の地蔵菩薩坐像（現市指定文化財）ほか仏像多数損壊した。 ・境内の山林が各所で崩壊した。 ・方丈は地震と崖崩れで倒壊した。〔鎌倉震災誌〕 ・現方丈は、昭和 18 年（1943）に、京都今出川の旧般舟三昧院（はんじゅざんまいいん）から総門とともに移建されたものである。 〔鎌倉市文化財総合目録 ―建造物篇―〕
円覚寺（山ノ内村）㉖ ・境内諸堂宇が大半破損した。〔基熙公記〕 ・門前にある池の橋が崩落し、境内諸堂や方丈、寺家（じけ）等が崖崩れにより壊滅した。 ・本堂と拝堂の基壇が裂けて泥水が涌出し、堂内の仏壇が潰れて本尊が泥中に墜落した（液状化現象か）。 〔祐之地震道記〕 ・大正地震の際、この時倒れた同寺仏殿の柱の枘（ほぞ）から墨書が現れ、元禄地震で同仏殿が倒壊したことや、その復旧に３年を要したことが明らかとなった。 〔鎌倉震災誌〕	円覚寺（山ノ内）㉖ ・国宝舎利殿が倒壊した。 ・仏殿・方丈・庫裡・書院・坐禅堂・南北下馬門（門前本道の、馬道両端手前にあった２基の門のこと）・総門・勅使門・唐門などが全壊した。 ・舎利殿後方の開山堂（現市指定文化財）と北条時宗廟などが半壊した。 ・塔頭の仏日庵・黄梅院・如意庵・寿徳庵・松嶺院・蔵六庵・帰源院・臥龍庵・済陰庵・富陽庵・伝宗庵・富陽庵・雲頂庵・白雲庵の建物が全壊した。 ・境内では、塔頭の続灯庵のみが焼失した。 〔鎌倉震災誌〕

村方（現市内各地区）の被災状況	
雪ノ下村・小町村（⑬の周辺地域） 若宮大路から由比ヶ浜（雪ノ下～由比ガ浜） ・由比ヶ浜の大鳥居（一ノ鳥居）⑬a が破損した。 ・由比ヶ浜に至るまでに石の鳥居が３基あり、２基は倒れて１基は崩れかかっていた。 ・雪ノ下の町は少し頽れた⑬。 ・門前雪ノ下の民屋の 10 分の１が破損した⑬。 ・二ノ鳥居⑬b まで津波が入った。 ・由比ヶ浜の辺は、津波が打ち寄せ通行ができなくなった。 〔基熙公記・祐之地震道記〕 ※⑬a～⑬e は、図６参照。	雪ノ下・小町（⑬の周辺地域） 若宮大路から由比ヶ浜方面（雪ノ下～由比ガ浜） ・一ノ鳥居（現重要文化財）⑬a、二ノ鳥居⑬b、三ノ鳥居⑬c が全壊し、震災後一ノ鳥居のみが修復された。ほか２基は鉄筋コンクリート造で復興された。 ・段葛の桜は火災のために西側半面の枝を焼かれたが、樹幹は焼けず枯死を免れた⑬。〔鎌倉震災誌〕 ・津波は砂丘を越えずに若宮大路に浸入し、一ノ鳥居付近⑬a に達して海岸橋際の四ツ角付近に漁船一艘を打ちあげ⑬d、さらに、滑川を遡って延命寺橋付近に達した。同寺近在の川沿いにあった海軍軍人井上敏夫邸で、遡上した津波が倒壊建物の部材を持ち上げた⑬e。〔鎌倉震災誌・本稿〕 ※⑬a～⑬e は、図６参照。
山ノ内村 ㉗ ・山ノ内の離山（はなれやま）より建長寺までの在家は全て潰れ、円覚寺㉖・東慶寺㉘・明月院㉙・浄智寺㉚・建長寺㉕が大半破損し、山が所々で約 15mずつ崩れた。 〔基熙公記〕 ・円覚寺門前㉗では在家が 200 軒ほどあるが皆倒れていた。谷々には寺家が数多くあって、この辺りは山が崩れて同所との通路が途絶した。 〔祐之地震道記〕	山ノ内 ㉗ ・駐在所が全壊した。 ・鉄道の被害は、扇ヶ谷トンネル山ノ内側入口㉛の崖がわずかに崩れた。〔鎌倉震災誌〕 ・円覚寺㉖・東慶寺㉘・建長寺㉕などの被害は甚大であった。
手広村（㉝の周辺地域） ・地震は４月22日から頻発しており、その影響で田畑や道筋などのうち、規模の大きいところが「中田四拾四間」「中田廿九間」等の範囲で被災した。大地震発生前から余震による被害があったことが窺える。 〔田畑地震筋帳〕 ・地震で地下水が絶えて不作になったため、畑方での金納を嘆願したこと、さらに追い打ちをかけるように旱魃になって、村々が困窮した。 ・内海家住宅㉝（手広 758 番地）について。当家と梶原村の「車屋」の２軒だけが倒壊を免れた。 ・同住宅は、地震後宝永３年（1706）に改築再建（ヒロマ上部の大梁枘墨書銘）。 〔本稿〕	手広（㉝の周辺地域） ・同地区の地震関係史料は不明。 ・内海家住宅㉝は、「家屋半潰」で、倒壊を免れた。 ・内海家住宅（現県指定文化財）は、昭和 56 年（1981）に鎌倉市二階堂の覚園寺境内⑩に移築復原された。 〔本稿〕

村方（現鎌倉市近在）の被災状況	
小坪村 ㉞ ・「こつ村（小坪村ヵ）」の切通が破損し、同地の民屋が全て津波にとられた。〔基熙公記〕	小坪 ㉞ ・津波の高さ7.1mと推定された（理学博士中村左衛門太郎氏の論文より）。 ・小坪トンネルは両入口の崖が崩壊し、飯島道も崖が崩れて共に通行を遮断した。 ・飯島道は山脚の海に干潟を生じたため、同所との連絡は可能であった。 ・（遺体の処置）逗子町小坪火葬場が倒壊したため、由比ガ浜と佐助の旧火葬場を臨時火葬場に指定して露天火葬を実施した。 〔鎌倉震災誌〕
江ノ島 ㉟・片瀬村 ㊱ ・江ノ島の弁才天と岩穴は無事であったが、山は所々が砕け、津波が入った（ところもあった）㉟。片瀬の在家は全損し、津波に流された㊱。〔基熙公記〕	江ノ島 ㉟・片瀬 ㊱ ・江ノ島神社は無事。桟橋が流失した。 〔鎌倉震災誌〕

※前掲註⑶及び⑻は、本文末尾の参考文献を参照。

※本稿作成にあたり、河内家・光明寺・明治大学博物館からご所蔵品の写真及び史料翻刻の掲載許可を賜りました（敬称略・50音順）。篤く御礼申し上げます。

（鎌倉歴史文化交流館学芸員）